

相馬中学校在学中の思い出<sup>(※1)</sup>中第 29 回卒 青田 農夫 雄<sup>(※2)</sup>

私は中学校に入学して迷いなく剣道に精進いたしました。もちろん当時は正課にもなっており、幼少の頃から祖父なり父なりの稽古を見ていたからぐんぐん上達いたしました。

その時の剣道の先生は中山博道先生の高弟で錬士 5 段園部武<sup>(※3)</sup> 先生でした（昭和の始め東京さいねい館に於て展覽試合に出場）。園部先生は、身長 165cm、体重 75kg ぐらい、酒豪家で晩酌酒一升というから驚き入ったものでした。眼光炯炯として気品あるひげをたて、堂々たる風格の持主でありました。得意技は片手右上段でその打込の鋭さは敵なしの感でありました。

## ◎寒稽古

明日の朝から寒稽古だ。部員全員で柔道場と剣道場を区切った講武道の掃除点検です。床板のぬけ釘の頭をたたいたり、ささくれが出ていないかと安全を確かめる。雪の朝 10cm ぐらいまでは自転車に乗れたが、20cm になると 6km もある椎木からでは楽ではなかった。

朝 1 時間以上も立通しの稽古ですから、授業中は居眠りは必至です。特に 2 時間目はつらかった。数学の梅田<sup>(※4)</sup> 先生はよく理解してくれて、「青田は相中剣道部を背負っているんだから仕方がない」と申され私の手をつかんで「青田の手は短指形型だよ。この形は物事に器用なのだ。それだから剣道は上手なんだ」とほめていただきました。するとクラスの皆さんもそれぞれ自分の手を見つめていたことがいまだに目にうかびます。

## ◎東京での夏稽古

私達 5 年生の時、東京九段下の高野佐三郎大先生の道場（修道館）に、3 年生以上 13 人の部員は 10 日間の夏稽古に派遣させていただきました。この予算は多分学校側の郷友会費からだったと思います。道場近くに宿舎をとり往復稽古着姿で通った。左脇に面をかかえ、右手に 3 本入の竹刀袋を持って「これ江戸ッ子よ」と見よがしの顔をして道場に向うのです。その様子は今流行語の「かっこうよい」の一言で得意満々たるものでした。しかし道場の中はそんな「かっこうよい」ところではありません。道場の中は極めて神聖なもので、剣道は礼に始まって礼に終るとされており。威厳高い先生方がずらりとおいでになり、雰囲気肝をぬかれたようでした。「ヤァー」とあらん限りのかけ声とともにあたっていきますが、先生達の剣先三寸より先に入れません。剣先三寸のところまで行くには、面なり小手なりしびれるほど打たれます。なにくそと思って打込みますと、いつの間にか自分の体は入口の外に突き出されている。もうその時は息がつけ合せられない、「参りました」の態であります。そんな時、技というのは恐いものでありすばらしいものであるという事がしみじみ感じられました。下級生の荒清孝君など元気一杯の者もさすがに参った様子でした。

## ◎県大会

県下中等学校各部大会、これは当時の呼び物でありました。もちろん選手の銚衡も厳しい。各校の選手の名簿とともに成績表を添付しなければならないのです。つまり 150 人の学年であれば 100 番までの成績順位でなければ選手にはなれなかったのです。いま考えると文武両道でなければならなかったのです。私は 4 年生頃から席順が中の方になってしまった。剣道の選手になりたい、勉強をしなければならぬ。苦しかった。しかしなんとかこぎぬいて選手権は保ったのです。

5 年の時は主将で責任は重かった。選手 5 人中、5 年生から私と川崎正夫<sup>(※5)</sup> 君の 2 人、あとの 3 人は下級生である。場所は福島です。頑張りましたが 2 回戦で負けました。くやしかった。帰りの車中で、剣道部からぬけた富田重延<sup>(※6)</sup> 君、松岡重尊<sup>(※7)</sup> 君がここまで一緒にやってくれたらもう少しよいところまでいけた

のにな一、とうらみを彼等におきかえて涙をさそった。

しかし私の残す技の財産は全部下級生にやるんだ、白戸敏造<sup>(※8)</sup>君、瓜生誠一<sup>(※9)</sup>君、古川益治<sup>(※10)</sup>君、横山重義君、彼等の顔を見るごとにそう思いをこめていたものでした。

県大会が終ると全校生に各部の監督からその成績報告会があるのです。どの部もそれほどの成績ではなかったのですが、選手の労をねぎらってそれぞれによくほめたたえてくれました。なかでも野球部の監督で歴史の上田多次郎<sup>(※11)</sup>先生はとてもお話が上手で、1回戦でやぶれてはいるもののあたかも決勝戦までいったかのごとくユーモアをまじえながら報告されましたことが印象深く残っています。

…… 中 略 ……

### ◎運動会

相中の運動会は相馬中村町の大人気の催しのひとつでありました。なかでも相馬郡内16校（上真野村から北の小学校）対抗リレーに人気がありました。二の丸グラウンドが満員で身動きもできないほどでした。柔剣道部員は警備係で、警察署からサーベルをお借りいたしまして腰にさげ、ガチャガチャと得意満面として場内の整理、警備に当たった。各小学校の応援も花々しくにぎやかなものでした。

大野小学校応援歌 〱羽黒おろしに鍛えたる……

駒ヶ嶺小学校応援歌 〱鹿狼おろしに鍛えたる……

優勝校には優勝旗が授与されたが、その優勝旗はどこにあることでしょうか。

### ◎学校の綱紀

学校の規律は昔の軍隊の規律にはほぼ準拠しておりました。軍事教練もありまして、予備兵役将校2名でその指導に当り、編上靴にゲートルを着装して中隊訓練まで受けました。原町出身の同級生小林栄一君の中隊長としての指揮振りは全校一番でした。学業もよく陸士にパス、太平洋戦争に立派な業績をたてられたとお聞きいたしております。

中学時代は、映画など毎日でも見たい年代でしたが、学校の許可するもの以外は見られませんでした。もし許可外のものなど見たら大変なことです。学校側はもちろん5年生からお目玉を頂戴するというきびしさであったので、女性関係など少しも芽生えることもできなかった次第です。

### ◎卒業式

優等生は金時計をいただいたが、私は学校から剣道初段の段位と5年間無欠席で賞状と硯箱1個、相馬子爵家より剣道精進のゆえをもって黒の羽織地一反を拝領いたしました。

右の次第で学校生活の重みをどっと感じ、校長先生はじめ諸先生方ありがとうございますと感謝しつつ、明日から実社会に出るんだ、真面目になんでもやろうと決意したものです。

(※1) 創立80周年記念誌『相中相高八十年』〈1978(昭和53)年5月7日発行〉 第四部「思い出の記」より。

(※2) 昭和6(1931)年卒。大野出身。

(※3) 相中教諭：大正11(1922)年～昭和18(1943)年 剣道/作業。

(※4) 梅田政治郎 相中教諭兼舎監：大正5(1916)年～昭和5(1930)年。

(※5) 相中第29回、(旧姓川崎)木村正夫。上真野出身。 (※6) 相中第29回、若松市出身。

(※7) 相中第29回、中村出身。 (※8) 相中第30回、昭和7(1932)年卒。飯豊出身。

(※9) 相中第30回、中村出身。 (※10) 相中第32回、山上出身

(※11) 相中教諭：大正12(1923)年～昭和7(1932)年。